

称号及び氏名 博士（言語文化学） 本田 明子

学位授与の日付 平成 29 年 3 月 31 日

論文名 「日本語日常談話にみる重なりの諸相
—母語話者場面と接触場面の比較—」

論文審査委員 主査 張 麟声
副査 西尾 純二
副査 山東 功

論文要旨

1. 研究の目的

本研究は、日本語の日常談話における重なりを対象とし、重なりがコミュニケーションを進めるうえでどのように機能しているかを明らかにし、日本語の会話教育における言語行動の指導に生かすことを目的とする。

発話の重なりとは、複数の話者が参加する談話において、ある一時点で複数の話者が同時に音声を発する現象をさしている。この現象は、「割り込み発話」「さえぎり」などとも呼ばれているが、「割り込み」「さえぎり」といった名称は、この現象の負の側面を象徴している。日本語の談話における重なりには、相手の発話をさえぎるのではなく、ともに会話を成立させる「共話」（水谷 1993）に寄与する重なりがあることも指摘されており（本田 1997、深澤 1997 他）、発話を妨げるものばかりではない。本研究では、この現象の談話の進行に寄与する積極的な機能をおもに研究の対象とするため「重なり」と呼んでいる。

上述のように発話の重なりには、現在の話し手の発話権を奪うという意味での否定的な側面と、会話に対する熱心さと連帯感を示すという肯定的な面が指摘されている。本研究では、この重なりの肯定的な側面に着目し、この重なりの機能を生かして、会話に積極的に参与していることを示し、母語話者と学習者の会話の不均衡性の解消につながる会話教育への応用をめざす。

2. 研究の方法

本研究は、まず、日本語母語話者の日常談話を質的に分析し、重なりの機能を明らかにしたうえで日常談話における重なりの出現数や使用される表現を分析する。さらに接触場面（相手言語接触場面とよばれる学習者と日本語母語話者との日本語による会話の場面）

における重なるの使われかたを分析し、母語話者場面との比較により、その特徴を明らかにする。

重なるの分析のデータには、20代から70代までの男女2名ずつの協力者に依頼して日常の自然談話を収集した『日常』データ（遠藤・小林・佐竹・高橋編 2016）、主に大学生の自然会話データを収集した『BTSJ』（宇佐美 2011）、そして筆者が独自に収集した年齢差のある接触場面のデータ（以下「年の差」データ）をもちいた。

3種のデータは、発話文の認定など、同じ原則に従い文字化されている。

3. 先行研究

サクスらの会話分析では、「一度に一人が話す」ことは会話の原則であり、重なりは会話の乱れの一つであるととらえられている。しかし、日本語の談話の重なりに関する先行研究では、日本語における会話の重なりは、談話の進行を遮るように働くものだけではなく、コミュニケーション・ストラテジーとして機能するものがあることが指摘されている。

だが、日本語教育への応用を視野に入れ、重なるの様相を記述し機能を分類した研究は十分だとはいえない。

4. 研究の結果

4.1 母語話者場面における重なるの機能

日常談話の分析により、重なるの終了地点に着目し、ターンの移行を生じる重なりと生じない重なるの2つに分類した。さらにそれぞれの機能をみると、ターンの移行を生じる重なりにはターンをとるための機能をもつものと、相手の発話への積極的な関心・興味を示す機能をもつものがあることがわかった。そして、ターンの移行を生じない重なりには共感性を示し、会話を維持する働きをもつものがある。また、必ずしもターンの移行を生じるとは限らないが、移行することが多いものとして、人間関係調整機能をもつものがあることを指摘した。この人間関係調整機能は、ポライトネス・ストラテジーとしてはたらくもので、相手の face の侵害の度合いが高いときほど、ターンの移行を生じやすいことが推察される。

以上、母語話者場面の分析から、抽出した日本語談話における重なるの機能は以下の4つである。

- ① ターン取り
- ② 興味・関心の積極的な表示
- ③ 人間関係調整
- ④ 共感性の表示・会話維持

サクスらの会話分析では、重なりは「会話の乱れ」とされているが、日本語の日常談話においては、重なりは上述のような機能を持ち、必ずしも乱れとは限らず、重なりによって会話管理がおこなわれていることを示した。

さらに、『日常』の同性・同年代データにおいて、上の4つの重なるのうち、「興味・関

心の積極的な表示」の出現率がもっとも高く、次いで「ターン取り」の重なりが多いことから、重なりがターンの移行との関連が強いことを明らかにした。

また、それぞれの重なりに使用された言語表現を列挙し、「あいづち詞」をともなう重なりが頻度が高く、あいづちを重ねて発話につなげるターンの移行の方略がとられていることを示した。

4.2 接触場面における重なり

接触場面の「年の差」データにおいては、重なりの出現数が極めて少なく、あいづちが多用されていた。つまり、「年の差」データでは、あいづち詞を重ねて発話につなげるというターンの移行がおこなわれず、話し手と聞き手の役割が固定化する傾向がみられる。

『BTSJ』の同世代の接触場面データでは、年齢差のある「年の差」データよりもあいづちが少なく、重なりが多くみられた。しかし、重なりの中では、「ターン取り」の重なりがもっとも多く、次いで「興味・関心の積極的な表示」が多かった。また、「年の差」データ同様、あいづち詞による重なりからのターン以降の例は少なかった。

4.3 母語話者場面と接触場面の比較

上述のように母語話者場面では、興味・関心の積極的な表示や、共感性を示す重なりがよく使われているが、接触場面でもっとも多くもちいられるのはターン取りの重なりであった。

また、母語話者場面では、あいづちからターンの移行へとスムーズに流れていくのに対し、接触場面では水谷（1993）が「欧米型」の話し方の特徴として「対話」と称した話し手・聞き手の役割がはっきりした話し方がなされていることもわかった。

さらに、接触場面では、会話の相手との親疎や年齢差によってあいづちや重なりの頻度が異なることもわかった。

このように、母語話者場面と接触場面の比較によって、日本語母語話者の会話は、水谷（1993）で指摘されたように、「共話」的に成立しており、このような話しかたを学習者が習得することがむずかしいことが明らかになった。

水谷（1993）では、日本語の「共話」的な話し方のマイナス面を示し、日本語は「共話」から「対話」への切り替えが進みつつあると論じている。しかし、それから20年以上経過した現在も、日本語の日常談話においては依然として「共話」的な会話がおこなわれていることが本研究の結果からも観察された。

5. 日本語教育への提言

以上の重なりの分析から、日常の談話において、母語話者場面と接触場面とでは、会話の流れに違いがみられることが明らかになった。

張（2010）は、「対照研究、誤用観察、検証調査」の三位一体の研究モデルを提唱しているが、このモデルは日本語教育のための研究モデルであり、重なりのような言語行動につ

いても、この研究モデルを援用することが必要であると考え。また、この三位一体の研究モデルは習得研究としてだけではなく、母語話者が自分の母語について意識化し、新たな認識をもつ助けになるという点でも非常に重要である。

コミュニケーション能力を構成する要素として、Canale (1983) は「文法能力」「社会言語能力」「談話構成能力」「方略能力」の 4 つをあげているが、日本語教育において、これらの能力を養う必要性は指摘されながらも、教室における学習内容の中心は 1) の文法能力の育成に置かれ、重なりのような言語行動は、自然に、あるいは日本語母語話者とのインターアクションのなかで身につけるものとされてきた。

しかし、本研究で示したように接触場面においては上級の学習者でも、あいづちや重なりの種類や回数が限られている。言語行動についても教室のなかで意識化して学習することが必要なことがわかる。

重なりの学習には、重なりを生成するために必要な「文法能力」、すなわち堀口 (1997) 等で示されたあいづち詞についての知識を習得し、次に「社会言語能力」として、日本語母語話者がどのように重なりをもちいるかを知ることが必要である。そのさい、『日常』データのような自然談話コーパスをもちいて、日本語においてどのくらいの頻度で重なりがもちいられているかを見るのが効果的だと思われる。

また、言語行動の対照研究によって、自分の母語との重なりの頻度の差を知ることも必要となる。さらに、「談話構成能力」として、さらにあいづちからターンの移行へとつながる重なりの使い方を学び、「方略能力」として、重なりの機能を知り、円滑なコミュニケーションにおいて効果的にもちいる方法を知る。

このように重なりにおける「文法能力」「社会言語能力」「談話構成能力」「方略能力」という 4 つの要素を意識化することが、重なりの習得につながると考えられる。

6. 今後の課題

今後の課題は、言語行動としての重なりに三位一体の研究モデルを援用することである。

言語行動の対照研究、誤用観察、検証調査をおこなうことで、言語行動を可視化し、日本語教育において言語行動を扱う方法論の確立をめざしたい。

学位論文審査結果の要旨

1 この論文の学術的意義

論文は次のように7章からなっている。

- 第1章 本研究の目的と意義
- 第2章 先行研究と本研究の立場
- 第3章 本研究の方法
- 第4章 母語話者場面の重なり
- 第5章 接触場面の重なり
- 第6章 母語話者場面と接触場面の重なりの比較
- 第7章 日本語教育への提言

従来では、重なりの、会話に寄与する一面についての議論もあるものの、「割り込み発話」、「さえぎり」といった呼び方から分かるように、会話の乱れとしてとらえられることが多かった。それに対して、本論文では、重なりの積極的な一面を新たな視角から掘り出して、丁寧に記述を行い、また、その日本語教育における導入の可能性についても意欲的に検討した。

2 この論文の諸側面に関する具体的な評価

この論文は、テーマの選定、研究の方法、先行研究の取り扱い、論述の展開、研究の結果のそれぞれの項目について、次のように評価できる。

テーマの選定：

文の内部構造を研究対象とする「文法」の角度から日本語教育のことを考える課題の多くが、すでに一通りの解決を得たので、研究者の目は最近「文」のレベルを超えた「談話」のほうに向け始められている。その状況の中で、論文提出者は、談話における、異なる話者が同一時間帯に同時に発話する重なりという現象にいち早く着目し、現象自体に関する綿密な記述、及び、記述した成果を日本語教育の世界に導入することを研究テーマとした。テーマの選定は合理的で、時代の先端を行くものと言える。

研究の方法：

この論文は、記述言語学的方法及び第二言語習得研究の方法を用いてまとめられている。まずは記述言語学的方法を用いて、日本語母語話者の日常談話に表れている重なりを丹念に分析し、その担っている談話的機能の角度から従来に見られない分類を行った。それから、第二言語習得の方法を用いて、接触場面における学習者の重なりの使用状況を記述した上で、母語話者のそれと比較して特徴を明らかにし、今後の日本語教育研究の課題に繋げていくという流れで論述を行っている。

先行研究の取り扱い：

日本語の重なりについての研究は、欧米言語学からの流れと国内の「言語生活」研究からの流れがあり、その両方の流れにおける重要な文献を丹念に批評した上で、記述言語学的な研究を行った。また、言語教育の世界における発話ターンの交替などにかかわる先行研究を踏まえて、重なりの研究成果をいかに日本語教育の世界に導入していくのかについて検討した。先行研究の収集、評価及び利用のいずれの点から見ても適切に作業が行われている。

論述の展開：

重なりをまず異なる話者の発話のどの部分とどの部分とが重なっているかという構造の角度から、先行研究の分類を見直し、さらに、得られた構造的類型の一つ一つを機能的な観点から記述しなおした。それから、学習者の発話に見られる重なりの使用状況と比較し、日本語教育における導入の可能性を追求した。展開は論理的で、過不足なく行われている。

研究結果：

従来、基本的に「割り込み発話」、「さえぎり」としてとらえられてきた重なりに、次の4種類からなる積極的な機能を見つけ出したことがまず大きな成果である。

- ① ターン取り
- ② 興味・関心の積極的な表示
- ③ 人間関係調整
- ④ 共感性の表示・会話維持

それから、十分に成功したとは言えないものの、日本語教育における重なりの指導の可能性を追求した部分もこれからの研究者たちによって受け継がれていく重要な成果だと考えられる。

3 審査委員会の結論

本審査委員会は、全員一致で、この論文が以下の人間社会システム科学研究科の博士論文審査基準をすべて満たし、博士学位の取得にふさわしいものであると判断する。

- 1) 研究テーマが絞り込まれている。
- 2) 研究の方法論が明確である。
- 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。
- 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。
- 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。